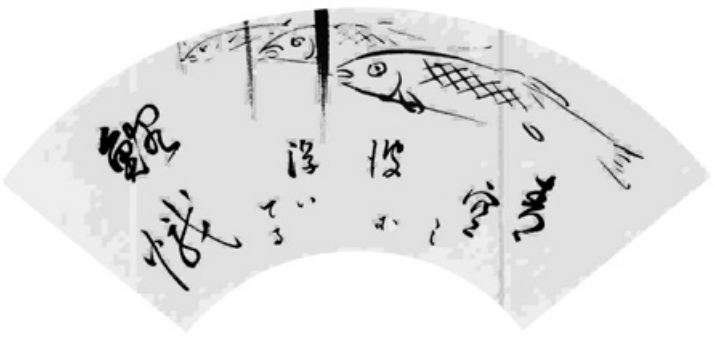
神成

発行：救いの光教団
編集：神成編集室
東京都世田谷区北沢（〒155-0031）2-22-10
電話 代表03(3413)0123
http://sukui.jp
毎月1回1日発行
購読料 1部80円
（会員の購読料は会費に含む）

2024
No.621
5月号

―若人―

天をます大樹も双葉のいと小さき
頃もありける世にしあるなり
形のみ教ゆる学のうたてけれ
心の盲そのままにして
宝といへど正直の
宝に優るものはあらじな



青空の
波にういてる
鯉幟
神言霊

『鯉は魚の観音様である。
真鯉の鱗は三十三枚である。』

◎教団方針

信徒よ速やかに目覚めよ、
それは光を受け、邪を捨て、光を授け、
正に生きる事である

◎方針のみちしるべ

（一）みつめなおそう明主様の心
（二）つらぬきとおそう明主様の心
（三）教団綱領を尊び実践する
（四）信仰継承は家族と家庭円満から

神言霊

言霊について

言霊というのは一つ一つ意味がある。それで、一つ一つの綴り方によって、善の働きと悪の働きをする。良いことを言えば善の働きをする。悪い意味になると、人間の耳に入っても良い気持ちはしないです。あの人を良い気持ちにしよう、とかは霊界に…霊界と言ってもいろいろある。言霊界に言葉は響く。それから考えですね。良い考え、悪い考えですね。それは想念界に影響する。これは言霊界よりもいっそう深い…密度のごく濃いわけですね。だから気持ちを想うだけで霊界が違っちゃう。そこで良い言霊を使う。そこで神歌とか祝詞とか良い言霊を使ってある。良い言霊といっても、読んでスラスラと感じが良くなければならない。良い言霊でも、感じが良く、柔らかく、滑らかにいかなければならないですね。

想念について

〈お伺い〉 霊界は意思想念の世界とうけたまっておりますが、意思の疎通はどういう方法ではかるのでございましょうか。

【神言霊】 霊界に言葉もないことはないがごく少ない。多くの場合は目で通ずる。霊界では非常に敏感で、肉体はかえって邪魔になるくらいで、さらに高級霊になると目も使わず、気持ちだけで通ずる。現界では間違ったことをしたり、想ったりして、霊が曇っているので、感受性が鈍っている。唯物的な教育で、智慧は出てもこういう働きは落ちているが、本来なら霊線を通じ、遠くの人の考えていることがわかるくらいになるべきであろう。

〈お伺い〉 人助けをさせていただきました場合はいかがなりましょうか。

【神言霊】 人助けをすると、その人が感謝するでしょう。感謝の想念は曇りを取るから魂はそれだけ大きくなる。魂は伸縮自在です。

浄霊と神言霊拝読について

〈お伺い〉 霊体の曇りを浄めていただきますには、浄霊で浄める場合と、神言霊の拝読による場合と区別がございましょうか。

【神言霊】 浄霊は外からで、神言霊を読むと、つまり魂ですね。魂はなんでもないんだが、曇らせると、魂に影響するんです。これは魂が眠っているとか、曇っているとか…外形の影響によって、これだけがこれ（縮小）だけとなる。神言霊を読むと、アッと目覚める。だから中心から曇りが取れていく。魂というものは、心の心は絶対に清いんです。なにかの状態で、悪人でも目が覚めたり、いよいよというときに良いことをしたり、人の性…性善説、性悪説とあるが…ごく中心はそうなんです。その周囲だけがいろいろになる。だから、魂が大きくなったり小さくなったりする。御魂のふゆを、というのは御魂が増えるということです。

御講話中の明主様（右端）

令和六年春季大祭・春のみたままつり　三月感謝祭

会長挨拶

今日の御祭典（みまつり）を本部にご参拝の皆様をはじめ各教会、またそれぞれの場所で中継をご覧の皆様とともにお迎えさせていただきましたこと大光明、明主様に感謝申し上げます。

また、春の彼岸の入りにあたります、この日に、祖霊様のご供養のみたままつりを執り行わせて頂きましたこと、重ねて感謝申し上げます。

三月も半ばをむかえ、春の花も梅、桃、桜と咲いてまいりますが、この時期はやはり桜の開花が気になるところではないでしょうか。

桜と梅はどちらも「このはな」というようですが、木花（このはな）と兄花（このはな）の違いについて、明主様は、『花でいえば木の花は桜で、兄の花は梅です。どちらも観音様ですが、木花（桜）は仏界の観音様、兄花（梅）は神界の観音様です。梅は春になると一番先に花が咲くでしょう、だから兄です。ふつうは花といえば桜を意味しますね。』と仰っております。日本を代表する花が観音様を意味していることを分からせていただくと、花を見る目も変わるのではないでしょうか。

明主様がお描きになられたチューリップ

さて、教団の春と秋の祭典は二つの祭典から成り立っています。

一つは、大光明、明主様への感謝と祈りの御祭典（みまつり）です。

もう一つは、お彼岸にあわせての祖霊様のご供養の祭典であります。

今月の神成では、明主様より彼岸の意味についての『神言霊』を頂いております。

その中で、明主様は『彼岸の時は太陽が冬至と夏至の真ん中を回る時で、ちょうどいい時なんですね。このちょうどいいということが、天国、極楽になるのです。つまり理想世界のことですね。』『ちょうどいい時に先祖を祀るというわけでこれは理屈なしにいいことですね。』と仰っております。

この事から、一年の巡りの中で理想世界を表すちょうどよい時期に大光明、明主様への感謝報恩と祖霊様に心を込めて供養のお気持ちをお捧げさせて頂くことは、とても意義があるという事が、お分かりいただけると思います。

さらに、私たちが生きている世界、また霊界、すべてがバランスよくつながっている世界が理想世界だと思います。今の世の中を見渡しますと、そのような事から、かけ離れている面も見受けられますが、私たち人間は、神様から理想世界を創り上げるという使命のもとに生を受けて、生かされています。まずは、明主様の教えのもとに、一人ひとりがバランスのとれた人間になることではないかと思います。

明主様は、主神から人類救済の大使命を受けられ、神の経綸ともいえる理想世界実現にむけて、『浄霊』という救いの業を私たちにお授けくださいました。その源は『おひかり』です。大切な人に思いをよせることは『おひかり』を通して神の光を授けることにつながるのではないでしょうか。

また、祖霊様に対しては私たちの供養のお気持ちの中に、大光明、明主様、幽世大神様からの御守護を祈らせていただくことも、霊界での向上につながるのではないかと思います。

今日はお彼岸の初日にあたりますので、ぜひそのような思いを持ちながら、お過ごしいただきたいと願っております。

さて、光守様のご浄化につきましては、すでにご存じと思いますが、一時は予断を許さない状況ではありましたが、現在のところ順調にご快復されております事、ご報告申し上げます。これもひとえに皆様のお祈りと想念浄霊による奇蹟の賜物であると信じております。

光守様は、昨年の六月六日、箱根の明主様の奥津城をご参拝されました。お祈りを終えられた最後の瞬間、「ゴー」という大きな音とともに大涌谷から吹き降ろしてきた強風のあと、光守様の足元に一つの松かさ（松ぼっくり）がポトリと降り落ちてきました。ほんの数秒の出来事で、すぐに静かになりました。光守様は、驚きと畏怖の念を持ちつつ、多くの松ぼっくりが落ちたのではと周囲を見渡しましたが、後にも先にもその一つだけでした。このような現象は神様からの贈り物という意味合いもあるようですが、光守様は、この松ぼっくりをお拾いになられ、明主様は私に何をお示しになられたのかと、帰りの車の中でお考えになられました。

その答えは『お叱り』であり、また、『現界に肉体がある限りは行動をもって御神業に勤しみなさい』という明主様の御心であると悟られ、今、ここにいる喜び、肉体をもって行動できる喜びをもって、この松かさを眺めつつ、明主様からのお諭しとして、御神業に勤しみたいと、昨年の天啓祭に御決意をなされました。そのお気持ちのとおり、各教会を御巡光され、信徒からの御守護願いに対してお取次ぎと想念浄霊をお続けになられておられました。

光守様が身をもって体験された明主様からのお諭しは、私たちに向けられた明主様からのメッセージでもあると受け止めてさせて頂き、「また会える日を楽しみにしています。」という光守様が入院先で発せられた「おことば」を希望に変えて、光守様に思いを寄せつつ、目の前の御用に精進してまいりましょう。

最後に、祖霊様のご平安と皆様のご健康を願いつつ、ご挨拶とさせていただきます。

本日はおめでとうございました。

令和六年天上祭・二月度慰霊祭

会長挨拶（抜粋）

昭和三十年二月十日に明主様が御昇天されてから六十九年を迎えました。

明主様は、本日の神歌でもお分かりのように梅の花を好まれ、梅の絵もお描きになられています。その梅の咲く時期に現世から天界へと昇られ、肉体から離れる事で天界からより強い御光を私たちに届けてくださっておられます。私たちは『おひかり』を首からかける事によって、その光を受信し、私たちの体を通して初めて浄霊を取り次ぐ事ができるわけです。例えて言えば、ラジオやテレビなどの受信機のようなもので、明主様からの光の電波をはっきりと受け止めることができるようにアンテナを合わせる事が大切であり、一人一人がそのような自分にならせていただかなくてはならないと思うのです。

それには常に明主様を思い浮かべ、霊線を通わせていただくことが大切です。それが教団方針にもあります、「光を受け、邪を捨て、光を授け」につながるのではないでしょうか。

また、明主様は「私の言うことを一つでも実践してくれることがうれしい。」とも仰っておられます。神言霊の拝読を通して、参拝、浄霊、奉仕に限らず、日々の生活におきましてもその実践ができるように努力してまいりましょう。

トピックス①

令和六年春季大祭・春のみたままつり 三月感謝祭執り行われる

令和六年三月十七日、春の彼岸の入りにあたるこの日、春季大祭・春のみたままつり併せて三月感謝祭が東京本部からの中継配信により各布教拠点とも一斉に執り行われた。教団における春と秋の大御祭典（おおみまつり）は大光明、明主様への感謝と祈りの祭典、お彼岸にあわせての祖霊様のご供養の祭典の二つの祭典から成り立っており、御神前にて厳粛かつ懇ろなる御供養の祭典が滞りなく執り行われ、会長より光守様が昨年六月に身をもってご体験された明主様からのお諭しによる御決意は私たちに向けられた明主様からのメッセージと受け止めてさせて頂き、御浄化中の光守様に思いを寄せつつ、目の前の御用に精進してまいりましょうとの挨拶があり、御招魂されたすべての御霊様の還魂を終えて祭典が納められた。

清水知明信徒総代、羽生峰人参拝者代表による玉串奉奠

東京本部の参拝風景

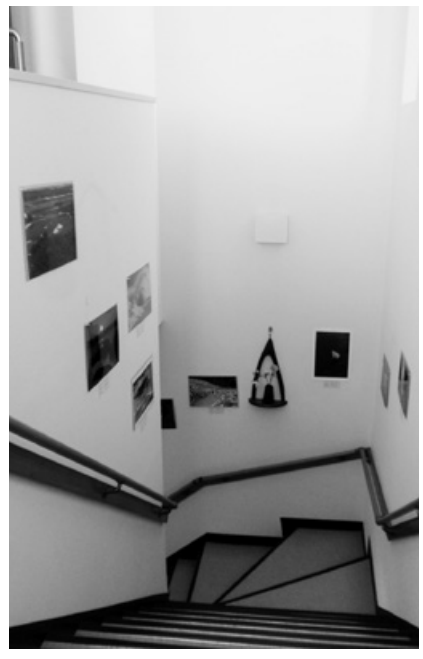
祖霊様と水子様に奉仕者の心のこもった手作りのお料理が盛られた御膳をはじめとしたお供え物

トピックス②

塩釜教会信徒の美術作品、浜松教会へ

去る二月二十六日、東京本部に展示されていた塩釜教会信徒の絵画や写真などの美術作品が巡回展示のため浜松教会へ運ばれ、展示が始まった。搬入当日は、光守様自らも出向かれ、山田教会長、小杉助師をはじめ信徒代表ほか信徒数名が出迎える中、作品の受け取りが行われた。教会玄関ホールをはじめ礼拝堂へ続く階段など各所に数多くの作品が展示されると、参拝に訪れた方達は素晴らしい作品に心を癒されつつ鑑賞を楽しんでいた。

美の世界に満ち溢れた浜松教会



光守様とお出迎えの信徒の皆様

令和六年天啓祭迫る！

昭和６年（1931年）日本寺本堂前において随行信徒との記念写真
（明主様は、前から2列目右から2人目）

平成６年６月１５日の鋸山からの日の出

明主様は昭和六年（一九三一年）、〝六月十五日、房州（千葉県）鋸山の日本寺へ参詣せよ〟という神の啓示を受けられ、前日の六月十四日、三十数名の信者とともに、両国から汽車に乗ってご移動されて鋸山の中腹にある乾坤山日本寺に泊られ、明くる朝、日の出を目指して山頂に向かわれました。そして昇る朝日に向かって祝詞を奏上したときに、霊界の夜昼転換の啓示を受けられました。

教団では、平成に入り新たなる霊界の転換が始まることを光守様（当時・会長先生）が信仰的ご感得によりお示しになり、明主様が天啓を受けられた日と同じ数霊となる平成六年六月十五日に教団初の天啓祭鋸山参拝が三九五名の信徒とともに厳粛かつ盛大に執り行われました。

そして令和をむかえ、奇しくも再び同じ数霊となる令和六年六月十五日が巡ってまいります。このたび、教団では平成六年と同じく鋸山日の出参拝を執り行うとともに、本部、布教拠点一斉に天啓祭の大御祭典を執り行います。

天啓祭および鋸山日の出参拝のご案内

◎祭典日　令和六年六月十五日（土）
　十一時　開式

◎参拝所　東京本部、各布教拠点
　（本部より一斉中継）

◎当日は六月感謝祭を併せて執り行います。

◎日の出参拝の募集案内は各布教拠点に用意してありますが、参拝人数が定員になりしだい締め切らせていただきますので、お早めにお申込みいただきますようご案内申し上げます。なお、今回は鋸山麓（ふもと）から登山を行い、日本寺境内地北隣の地点よりご来光を拝します。

今年のご来光参拝予定地からの眺め

VEGETABLE OIL INK　植物油インキを使用しています。